

旧町名	よみがな	由来	現在の町名	住居表示の実施	校下名	備考
揚地町	あげちまち	藩政時代、寺院か藩士が拝領した邸地を返納した土地を上地という。この所は、誰が上地したのか不明であるが、藩政記から、揚地町と呼んだ	石引2丁目、笠舞3丁目	S39.4.1	小立野	
浅野川上川除町	あさのがわかみかわよけまち	浅野川上流の川除け(堤防)が町地となったことからの命名であり、藩政期からの町名である	桜町、横山町、材木町	S41.2.1	材木	
芦中町	あしなかまち	藩政時代からの町名「足半町といふは並び短く、尻切れたる町なり」と伝えられ、はじめは足中町とも書く。のち芦中町と書いた	弥生1丁目、泉1・2丁目	S42.9.1	弥生	
愛宕一番丁	あたごいちばんちょう	佐久間盛政が金沢城に在城の頃、現広坂の上にあった愛宕社を前田利長の命で、宝泉坊の隣地に移し、卯辰愛宕社と称したことによる。弘化3年(1846年)から愛宕一番丁から三番丁となった	東山1丁目	S41.9.1	馬場	
愛宕二番丁	あたごにばんちょう	佐久間盛政が金沢城に在城の頃、現広坂の上にあった愛宕社を前田利長の命で、宝泉坊の隣地に移し、卯辰愛宕社と称したことによる。弘化3年(1846年)から愛宕一番丁から三番丁となった	東山1丁目	S41.9.1	馬場	
愛宕三番丁	あたごさんばんちょう	佐久間盛政が金沢城に在城の頃、現広坂の上にあった愛宕社を前田利長の命で、宝泉坊の隣地に移し、卯辰愛宕社と称したことによる。弘化3年(1846年)から愛宕一番丁から三番丁となった	東山1丁目	S41.9.1	馬場	
愛宕四番丁	あたごよんばんちょう	佐久間盛政が金沢城に在城の頃、現広坂の上にあった愛宕社を前田利長の命で、宝泉坊の隣地に移し、卯辰愛宕社と称したことによる。弘化3年(1846年)から愛宕一番丁から三番丁となった。慶応3年(1867年)愛宕一番丁から三番丁が、卯辰京町・中ノ町・老松町・宮川町となり、明治5年宮川町が愛宕四番丁となった	東山1丁目	S41.9.1	馬場	
穴水町一番丁	あなみずまちいちばんちょう	加賀藩老臣、長氏の上級家臣らが住み、上家中町と呼ばれたが、長氏の祖先が能登の穴水城に居たことにちなみ、明治になって、この名がつけられた	長町3丁目、長土堀1丁目	S40.9.1	長土堀	
穴水町二番丁	あなみずまちにばんちょう	加賀藩老臣、長氏の上級家臣らが住み、上家中町と呼ばれたが、長氏の祖先が能登の穴水城に居たことにちなみ、明治になって、この名がつけられた	長土堀1丁目	S40.9.1	長土堀	
穴水町三番丁	あなみずまちさんばんちょう	加賀藩老臣、長氏の上級家臣らが住み、上家中町と呼ばれたが、長氏の祖先が能登の穴水城に居たことにちなみ、明治になって、この名がつけられた	長土堀1丁目、芳齋1丁目	S40.9.1	長土堀・芳齋	
穴水町四番丁	あなみずまちよんばんちょう	加賀藩老臣、長氏の上級家臣らが住み、上家中町と呼ばれたが、長氏の祖先が能登の穴水城に居たことにちなみ、明治になって、この名がつけられた	長土堀1丁目、芳齋1丁目	S40.9.1	芳齋	
穴水町五番丁	あなみずまちごばんちょう	加賀藩老臣、長氏の上級家臣らが住み、上家中町と呼ばれたが、長氏の祖先が能登の穴水城に居たことにちなみ、明治になって、この名がつけられた	芳齋1丁目	S40.9.1	芳齋	
荒町一丁目	あらまちいっちょうめ	寛永年間には木ノ新保新町と呼ばれ、新しくできたのでこの名がついたといわれる。元禄の頃には荒町となっているが、荒町は新町の意であろう	本町1丁目	S40.9.1	此花	
荒町二丁目	あらまちにちょうめ	寛永年間には木ノ新保新町と呼ばれ、新しくできたのでこの名がついたといわれる。元禄の頃には荒町となっているが、荒町は新町の意であろう	本町1丁目、此花町	S40.9.1	此花	
荒町三丁目	あらまちさんちょうめ	寛永年間には木ノ新保新町と呼ばれ、新しくできたのでこの名がついたといわれる。元禄の頃には荒町となっているが、荒町は新町の意であろう	此花町、堀川町	S40.9.1	此花	
石浦新町	いしうらしんまち	もと石川郡石浦村であったが、寛文5年(1665年)頃、町地となりこの名がつけられた。城下町の本町の一つに数えられた。香林坊近くの石浦町と区別するため、この名で呼ばれた。地子町の一つ	菊川2丁目	S39.4.1	菊川	
石浦町	いしうらまち	もと石川郡石浦村であったが、元和元年(1615年)、前田利常の文書に見られる町名。本町の一つに数えられた	香林坊2丁目、片町1丁目、香林坊1丁目	S40.9.1/S41.2.1	長町	
石屋小路	いしやしうじ	もと安江町横町と呼ばれていた。藩政初期、藩の御用を勤める石工たちが住んでいたところから、この名がついた。明治4年からの町名	武蔵町	S45.6.1	松ヶ枝	
板前町	いたまえまち	藩政の始めころ、藩の台所奉行に属する板前、足軽組地であったので、この名がついたといわれる	天神町2丁目	S41.2.1	味噌蔵町	

蘭田町	いだまち	「いだまち」ともいう。藩政時代、この地が蘭田(いぐさの田)であったことによるという。地子町の一つ	長土堀2・3丁目、元菊町	S40.9.1/S41.9.1	長土堀	
石坂角場一番丁	いっさかかくばいちばんちよう	もと石坂村の村地であった。藩政時代、鉄砲の射的場を「角場」と呼んだことから、この町名になった。明治4年から一番丁から十二番丁まで区画された。中心部に近い所から一番丁、二番丁といった	野町2丁目	S42.9.1	野町	
石坂角場二番丁	いっさかかくばにばんちよう	もと石坂村の村地であった。藩政時代、鉄砲の射的場を「角場」と呼んだことから、この町名になった。明治4年から一番丁から十二番丁まで区画された。中心部に近い所から一番丁、二番丁といった	野町2丁目	S42.9.1	野町	
石坂角場三番丁	いっさかかくばさんばんちよう	もと石坂村の村地であった。藩政時代、鉄砲の射的場を「角場」と呼んだことから、この町名になった。明治4年から一番丁から十二番丁まで区画された。中心部に近い所から一番丁、二番丁といった	野町2丁目	S42.9.1	野町	
石坂角場四番丁	いっさかかくばよんばんちよう	もと石坂村の村地であった。藩政時代、鉄砲の射的場を「角場」と呼んだことから、この町名になった。明治4年から一番丁から十二番丁まで区画された。中心部に近い所から一番丁、二番丁といった	野町2丁目	S42.9.1	野町	
石坂角場五番丁	いっさかかくばごばんちよう	もと石坂村の村地であった。藩政時代、鉄砲の射的場を「角場」と呼んだことから、この町名になった。明治4年から一番丁から十二番丁まで区画された。中心部に近い所から一番丁、二番丁といった	野町2丁目	S42.9.1	野町	
石坂角場六番丁	いっさかかくばろくばんちよう	もと石坂村の村地であった。藩政時代、鉄砲の射的場を「角場」と呼んだことから、この町名になった。明治4年から一番丁から十二番丁まで区画された。中心部に近い所から一番丁、二番丁といった	野町2・4丁目	S42.9.1	野町	
石坂角場七番丁	いっさかかくばななばんちよう	もと石坂村の村地であった。藩政時代、鉄砲の射的場を「角場」と呼んだことから、この町名になった。明治4年から一番丁から十二番丁まで区画された。中心部に近い所から一番丁、二番丁といった	野町4・5丁目	S42.9.1	野町	
石坂角場八番丁	いっさかかくばはちばんちよう	もと石坂村の村地であった。藩政時代、鉄砲の射的場を「角場」と呼んだことから、この町名になった。明治4年から一番丁から十二番丁まで区画された。中心部に近い所から一番丁、二番丁といった	野町4・5丁目	S42.9.1	野町	
石坂角場九番丁	いっさかかくばきゅうばんちよう	もと石坂村の村地であった。藩政時代、鉄砲の射的場を「角場」と呼んだことから、この町名になった。明治4年から一番丁から十二番丁まで区画された。中心部に近い所から一番丁、二番丁といった	野町4丁目	S42.9.1	野町	
石坂角場十番丁	いっさかかくばじゅうばんちよう	もと石坂村の村地であった。藩政時代、鉄砲の射的場を「角場」と呼んだことから、この町名になった。明治4年から一番丁から十二番丁まで区画された。中心部に近い所から一番丁、二番丁といった	野町4丁目	S42.9.1	野町	
石坂角場十一番丁	いっさかかくばじゅういちばんちよう	もと石坂村の村地であった。藩政時代、鉄砲の射的場を「角場」と呼んだことから、この町名になった。明治4年から一番丁から十二番丁まで区画された。中心部に近い所から一番丁、二番丁といった	泉1丁目、野町4丁目	S42.9.1	野町	
石坂角場十二番丁	いっさかかくばじゅうにばんちよう	もと石坂村の村地であった。藩政時代、鉄砲の射的場を「角場」と呼んだことから、この町名になった。明治4年から一番丁から十二番丁まで区画された。中心部に近い所から一番丁、二番丁といった	泉1丁目	S42.9.1	野町	
石坂川岸一の小路	いっさかかわぎしいちのしょうじ	町名は野町と石坂村の境である泉用水沿いにあることから、石坂川岸町となり、明治32年、石坂川岸一の小路、二の小路となる	増泉1丁目	S42.9.1	中村町	
石坂川岸二の小路	いっさかかわぎしにのしょうじ	町名は野町と石坂村の境である泉用水沿いにあることから、石坂川岸町となり、明治32年、石坂川岸一の小路、二の小路となる	増泉1丁目	S42.9.1	中村町	
石坂川岸町	いっさかかわぎしまち	町名は野町と石坂村の境である泉用水沿いにあることから、石坂川岸町となり、明治32年、石坂川岸一の小路、二の小路となる	増泉1丁目、白菊町	S42.9.1/S44.2.1	中村町	
石坂町	いっさかまち	もと石坂村の村地に町家ができたことから、この名がついた。元禄9年(1696年)には、すでに町名が記載されている	野町2丁目	S42.9.1	野町	
石坂与力町	いっさかよきまち	寛文7年(1667年)、城下に居住していた与力たちを小立野及び泉に指定した与力組地へ移転した。泉の与力組地が、当町名となった	野町2・4丁目、泉1丁目	S42.9.1	野町	

一本松	いっぽんまつ	もと笠舞一本松、小立野一本松とも呼ばれていた。片側町で、一方町とっていたのが、誤って一本松になったともいわれる。地子町の一つ	笠舞3丁目、石引2丁目	S39.4.1	小立野	
井波町	いなみまち	慶応2年(1649年)、越中井波の真宗大谷派瑞泉寺の掛所がこの地に建てられたことによる。文政6年(1823年)から大衆免を冠称している。地子町の一つ	森山1丁目	S41.9.1	森山	
岩根町	いわねまち	藩政初期、馬術の名人岩根十蔵が開いた馬場があったので岩根馬場と呼ばれていたが、中期ころこの名がついたという。地子町の一つ	彦三町1丁目、瓢箪町、笠市町	S40.9.1	瓢箪町	
上田町	うえだまち	文政6年(1823年)、山の上町から分立したもので、かつてこの辺りが用水の上方にある田地であったことからこの名がついた。地子町の一つ	森山2丁目	S41.9.1	森山	
上野町	うえのまち	もと石川郡上野村の村地で、馬や牛が通る坂の上の野であったことからこの名がついたといわれ、文政4年に町地に加えられた。地子町の一つ	小立野3丁目	S39.4.1	小立野	
卯辰下町	うたつしたまち	卯辰山は、河北郡小坂荘の中心部から卯辰(東南東)の方向に位置することからの命名であろう。卯辰山の麓近くにあったことから、この名がついた。地子町の一つ	東山2丁目	S41.9.1	馬場	
卯辰高町	うたつたかまち	卯辰山は、河北郡小坂荘の中心部から卯辰(東南東)の方向に位置することからの命名であろう。卯辰下町より高い所にあったことから、この名がついた。地子町の一つ	東山2丁目	S41.9.1	馬場	
梅鉢清水	うめばちしみず	地内に梅鉢草という海草が生い茂っている清水があったことによる。もとは、大豆田村のうちで、明治4年からの町名	長土堀3丁目	S40.9.1	長土堀	
梅本町	うめもとちょう	明治2年、加賀藩の老臣一万八千五百石前田孝敬の邸地を東西に二分して作られた町で、その家紋「角の内梅輪」にちなんで、この名がついたという	大手町	S41.2.1	味噌蔵町	
梅本町西横丁	うめもとちょうにしよこちょう	明治2年、加賀藩の老臣一万八千五百石前田孝敬の邸地を東西に二分して作られた町で、その家紋「角の内梅輪」にちなんで、この名がついたという	大手町	S41.2.1	味噌蔵町	
梅本町東横丁	うめもとちょうひがしよこちょう	明治2年、加賀藩の老臣一万八千五百石前田孝敬の邸地を東西に二分して作られた町で、その家紋「角の内梅輪」にちなんで、この名がついたという	大手町	S41.2.1	味噌蔵町	
裏御小人町	うらおこびとまち	藩政時代、藩主の行列の際にその身のまわり品の茶弁当、矢箱、提灯などを運ぶ御小人の組地の裏手にあったので、この名がついた。地子町の一つ	扇町	S41.2.1	味噌蔵町	
裏金屋町	うらかなやまち	もと今の尾山神社の地あたりにあった。藩の初め、銀座役金屋彦四郎らが居住し、金銀貨を鑄造していたのでこの名がつけられ、元和の初め、この地に移されたという。金谷町とも書いた。地子町の一つ	東山2丁目	S41.9.1	森山	
裏五十人町	うらごじゅうにんまち	藩政前期、加賀藩士小幡宮内の下屋敷があったが、のち、足軽五十人が住んだので、この名がついた	中村町、増泉1丁目、白菊町	S42.9.1/S44.2.1	中村町	
裏傳馬町	うらてんままち	藩政時代、藩用の人や荷物を運ぶために六十六匹の伝馬が置かれた上傳馬町の裏側にあったことから、この名がついた。藩初は橋場町付近に置かれていたという	中央通町	S40.9.1	長町	
裏古寺町	うらふるでらまち	藩政初期この地に寺が集められていたが、元和のころになってそのほとんどを寺町台へ移し、跡地を古寺町と呼び、その裏手にあったことからの命名か	片町2丁目	S40.9.1	長町	
越中町	えっちゅうまち	万治3年(1660年)、加賀藩は長柄御小人300人を召し抱えたが、うち越中出身者がこの地に居住したことから、明治5年町名となった	横山町	S41.2.1	材木町	
大隈町	おおすみちょう	加賀藩の老臣、長大隅守の家臣が、寛文期に能登から移り住んだところで、新(荒)屋敷、新家中と呼ばれていたが、明治2年町名となった	中橋町	S41.9.1	長田町	
大藪小路	おおやぶしょうじ	藩政前期、加賀藩士、禄高七百石の大藪勤右衛門にはじまり、以降代々の居邸がこの付近にあったので、この名がついた。本町の一つ	片町2丁目	S40.9.1	長町	
御歩町一番丁	おかちまちいちばんちょう	藩政時代、藩主を警護する歩(かち)が住んでいたもので、この名がついた。はじめ観音下御歩(徒)町などと呼ばれていた。一番丁から五番丁がある。地子町の一つ	東山1丁目	S41.9.1	材木町	

御歩町二番丁	おかちまちにばんちょう	藩政時代、藩主を警護する歩(かち)が住んでいたため、この名がついた。はじめ観音下御歩(徒)町などと呼ばれていた	東山1丁目	S41.9.1	材木町	
御歩町三番丁	おかちまちさんばんちょう	藩政時代、藩主を警護する歩(かち)が住んでいたため、この名がついた。はじめ観音下御歩(徒)町などと呼ばれていた	東山1丁目	S41.9.1	材木町	
御歩町四番丁	おかちまちよんばんちょう	藩政時代、藩主を警護する歩(かち)が住んでいたため、この名がついた。はじめ観音下御歩(徒)町などと呼ばれていた	東山1丁目	S41.9.1	材木町	
御歩町五番丁	おかちまちごばんちょう	藩政時代、藩主を警護する歩(かち)が住んでいたため、この名がついた。はじめ観音下御歩(徒)町などと呼ばれていた	東山1丁目	S41.9.1	材木町	
桶町	おけちょう	藩政の初め、桶屋職人たちが多く住んでいたため桶屋町と呼ばれていたが、元禄のころからこの名になった。本町の一つ	彦三町1・2丁目、尾張町2丁目	S40.9.1/S45.6.1	松ヶ枝	
御小人町	おこびとまち	藩政時代、藩主の行列の際にその身のまわり品の茶弁当、矢箱、提灯などを運ぶ御小人の組地であったため、この名がついた。地子町の一つ	扇町、横山町、暁町	S41.2.1	味噌蔵町	
御仲間町	おちゅうげんまち	元禄のころは、御馬屋町と呼ばれ、藩の馬の世話をする仲間の組地があったことからこの名で呼ばれた。	元町2丁目、森山2丁目、小橋町	S50.2.1/S41.9.1	森山	
大音町	おとうまち	藩政時代、加賀藩士大音帯刀の下屋敷があったため、大音家中と呼ばれていたが、明治2年、この名がついた	石引3丁目	S39.4.1	小立野	
柿木畠	かきのきばたけ	寛永8年(1631年)・12年(1635年)の火災の教訓から、この一帯を火除地とするため、藩士の邸宅を移転させ空き地にし、柿の木を植えた。万治年間から再び藩士の邸地となったが、地名として残った	広坂1丁目、片町1丁目	S41.2.1	新竪町	H15.10.1 復活
柿木町	かきのきまち	三代藩主前田利常のときに火除地として城下の各地に柿木畠が設けられた。柿本人麻呂をもじり、柿の木のもとでは火が止まるに因んだといわれる。この地にも柿が植えられたが、後に町立でされてこの名がついた。地子町の一つ	扇町、天神町2丁目、暁町	S41.2.1	味噌蔵町	
角場川岸町	かくばかわぎしまち	町名は角場(鉄砲の射的場)と犀川川岸に因むと推測される。地子町の一つ	城南2丁目、菊川1丁目	S39.4.1	菊川	
鍛冶片原町	かじかたはらまち	鍛冶町と町続きで町の東側が外総構堀で民家のないことによる。町の格は「七ヶ所」であった	本町1丁目	S40.9.1	此花	
鍛冶町	かじまち	三代藩主、前田利常から刀鍛冶等で宅地を給わったものが集住し、はじめ安江鍛冶町と称されていたが、のち鍛冶町と呼ばれた。町の格付けは一部は「七ヶ所」と一部は「地子町」であった	此花町、本町1丁目、彦三町1丁目、安江町、笠市町	S40.9.1	此花	
主計町	かずえまち	大阪冬夏の両役に功をたてた加賀藩士、富田主計の邸地があったところなので、この名がついたといわれる。地子町の一つ	尾張町2丁目	S45.6.1	味噌蔵町	H11.10.1 復活 H16.5.1 区域拡大
片原町	かたはらまち	家が用水の片側のみにあったところによる。片原大衆免砂走(すなはせ)とも呼ばれた。地子町の一つ	森山1丁目、東山3丁目	S41.9.1	森山	
勝尾町	かつおまち	初め、この地に加賀藩士勝尾氏の屋敷があったことによる	芳芥2丁目、昭和町	S40.9.1	芳齋	
金石相生町	かないわあいおいちょう	慶応2年大野と宮腰とが合併したときに出来た町で、芝居小屋、茶屋などが建ち、昭和に入ってから濤々園ができ、賑わった町であった	金石北1～4丁目	S43.9.1	金石町	R3.11.1 復活
金石今町	かないわいままち	町名の由来はさだかではないが、古くより、海から上がられた佐那武の神様が通られたということで、夏祭りの時には家ごとに竹を飾り、当時の数を再現する	金石西2丁目	S43.9.1	金石町	R1.11.1 復活
金石御塩蔵町	かないわおしおぐらまち	加賀藩の塩蔵が建っていたことから付いた町名で、能登方面から多くの塩俵が運び込まれた	金石西4丁目	S43.9.1	金石町	
金石御船町	かないわおふねまち	加賀藩の御船手足軽の住んでいた所からついた町名	金石北1丁目	S43.9.1	金石町	R2.11.1 復活

金石海禅寺町	かないわかいぜんじまち	海禅寺という寺があったことからついた町名で、この寺がいつ頃に上越前町に移転したかはさだかではない	金石西1、2丁目	S43.9.1	金石町	R1.11.1 復活
金石上越前町	かないわかみえちぜんまち	江戸時代に福井と取引をしていた人達が住んでいた。以前は越前町と呼ばれ、日本の地図を作った伊能忠敬もこの町に一泊しており、上越前町は出町と呼ばれていた	金石西4丁目、金石北1、2丁目	S43.9.1	金石町	R3.11.1 復活
金石上新浜町	かないわかみしんはままち	江戸時代には新浜町と呼ばれており、後年、上と下に分かれた	金石西4丁目	S43.9.1	金石町	
金石上寺町	かないわかみでらまち	江戸時代に寺院が多くあるということで、寺町と呼ばれていた。後に、上・下で離されたが、上寺町の一部は御坊町と呼ばれていた	金石西3丁目	S43.9.1	金石町	
金石上浜町	かないわかみはままち	元禄時代に書かれた宮腰絵図に記されている由緒ある町名である	金石西4丁目	S43.9.1	金石町	R2.11.1 復活
金石上本町	かないわかみほんまち	本町の上口にあるためについた町名	金石西1丁目	S43.9.1	金石町	
金石冬瓜町	かないわかもりまち	江戸時代に要川を境として川向かいに町があった。宮腰の重要な港口の町であり、この町一町で御輿をかつぐことから、古くは、神守(かもり)町と呼ばれていた	金石西1丁目	S43.9.1	金石町	
金石下越前町	かないわしもえちぜんまち	江戸時代に福井と取引をしていた人達が住んでいた。以前は越前町と呼ばれ、日本の地図を作った伊能忠敬もこの町に一泊しており、下越前町は家も大きかったので荒町と呼ばれていた	金石西4丁目、金石北2丁目	S43.9.1	金石町	
金石下寺町	かないわしもでらまち	江戸時代に寺院が多くあるということで、寺町と呼ばれていた。後に、上・下で離された	金石西3丁目	S43.9.1	金石町	R2.11.1 復活
金石下本町	かないわしもほんまち	本町の下に連なった町で店屋も多く賑わった町であった	金石西3、4丁目	S43.9.1	金石町	H30.11.1 復活
金石下新浜町	かないわしんはままち	江戸時代には新浜町と呼ばれており、後年、上と下に分かれた	金石西4丁目、金石北2丁目	S43.9.1	金石町	
金石重胆寺町	かないわじゅうたんじまち	重胆寺という寺があったことから付いた町名、中山家文書の中に出てくるクリスタンの寺であったという。また、この寺は宮腰絵図の中にも載っている	金石西1、2丁目	S43.9.1	金石町	
金石新町	かないわしんちょう	元禄時代に書かれた宮腰絵図に記されている由緒ある町名である	金石西2丁目	S43.9.1	金石町	R1.11.1 復活
金石達磨町	かないわだるままち	達磨寺という寺があったのでついた町名であるが、この達磨寺が南蛮寺でクリスタンであったとの説もあり、また、きれいな水が多く湧き出たことから、酒蔵もあったと伝えられている	金石西1、2丁目	S43.9.1	金石町	
金石鉄砲町	かないわてっぽうまち	町の形が鉄砲の形に似ていたところからついた町名	金石西3丁目、金石北1丁目	S43.9.1	金石町	
金石通町	かないわとりまち	江戸時代には上通町と下通町にわかれていて、大店もあり人の通りも多く賑わった町であった	金石西3、4丁目	S43.9.1	金石町	H30.11.1 復活
金石長田町	かないわながたまち	藩政時代の古文書には、長田町と長田後町の町名がある。神社と関係があったようだが、後年合併された	金石西2丁目	S43.9.1	金石町	
金石新潟町	かないわにいがたまち	越後の新潟方面との商売取引をしていた人達がいたのでついた町名といわれる	金石西4丁目	S43.9.1	金石町	
金石浜町	かないわはままち	元禄時代に書かれた宮腰絵図に記されている由緒ある町名である	金石西4丁目	S43.9.1	金石町	R2.11.1 復活
金石古河町	かないわふるかわまち	江戸時代には上通町と下通町にわかれていて、大店もあり人の通りも多く賑わった町であった	金石西2、4丁目	S43.9.1	金石町	
金石本町	かないわほんまち	宮腰の中心を成していた町で、町年寄、町奉行の役所や大店があって町一番の大通りであった	金石東1～3丁目、金石北1、2、4丁目、金石本町	S43.9.1	金石町	

金石松原町	かないわまつばらちょう	藩政時代にはこの辺は松林や桑畑であった。明治になって家が建ち町名がつけられた	金石北1、3丁目	S43.9.1	金石町	
金石松前町	かないわまつまえまち	北海道松前と船で商売をしていた人達が住んでいた町で後年になり古河町と合併された	金石西4丁目	S43.9.1	金石町	R2.11.1 復活
金石味噌屋町	かないわみそやちょう	元禄時代に書かれた宮腰絵図に記されている由緒ある町名である	金石西2、4丁目	S43.9.1	金石町	H30.11.1 復活
金石湊町	かないわみなとまち	藩政時代にはこの辺は川が流れており、塩蔵へ入る船が着いたところから付いた名で、川の護岸石が一部残っている	金石西4丁目	S43.9.1	金石町	
金石横町	かないわよこちょう	元禄時代に書かれた宮腰絵図に記されている由緒ある町名である	金石西2丁目	S43.9.1	金石町	
金屋町	かなやちょう	もと今の尾山神社の地あたりにあった。藩の初め、銀座役金屋彦四郎らが居住し、金銀貨を製造していたのでこの名がつけられ、後に、この地に移されたという。金谷町とも書いた。地子町の一つ	東山2丁目、森山1丁目	S41.9.1	森山	
上安藤町	かみあんどまち	藩政時代、鉄砲組頭、安藤長左衛門の組地があったので、この名がついたという。また、あんどん町とも呼ばれた	石引1丁目	S39.4.1	小立野	
上石伐町	かみいしきりまち	戸室山から石を伐り出す藩の石伐職人20人の組地があったことによる。延宝年間(1673~81)に上、下石伐町に分立した。地子町の一つ	寺町3丁目、寺町5丁目	S38.6.1/S42.9.1	泉野	
上石引町	かみいしびきまち	藩政の初め、金沢城の石垣を築くため、戸室山から切り出した戸室石を引いて運んだ道筋であったので、この名がついたという。上・中・下石引町があった。いしびきちょうとも呼ばれた	石引1・2丁目、笠舞2丁目	S39.4.1	小立野	
上今町	かみいままち	今町は新しく町立てされたことによる。今町の年代は、不明だが、元禄年間(1688~1704年)、上今町・下今町の記録がある。本町の一つ	尾張町1丁目	S45.6.1	味噌蔵町	
上小川町	かみおがわちょう	藩政時代は、川(河)端町、西養寺町前、誓願寺前、玄門寺前などのまちであったが、小川に沿ったまちなので、明治4年、上・下小川町に改められた	東山2丁目	S41.9.1	森山	
上小柳町	かみおやなぎまち	小柳町は、かつて柳の木が生えていたとも、居住者の氏名によるといわれる。後年、上・下に分町したが、年代は不明。地子町の一つ	野町2丁目	S42.9.1	野町	
上欠原町	かみがけはらまち	崖縁の通りであるため、藩政時代は笠舞がけ原、がけ片原などと呼ばれていたが、のち、略してこの名がついた。明治4年、上・中・下欠原町となった。地子町の一つ	石引2丁目	S39.4.1	小立野	
上川除町	かみかわよけまち	川除は犀川の右岸近くの川原に堤防を築き、堤防の上に家を建て町立てしたことによる。寛政7年(1795年)から上川除町、中川除町、下川除町、犀川下川除町に分立した。地子町の一つ	菊川2丁目、幸町	S39.4.1	菊川	
上胡桃町	かみくるみちょう	この地の東惣構堀にかかる橋を、橋詰の染師黒梅屋の名によって黒梅橋といったが、俗にくるみ橋と呼んだことから、明治4年この名で町立てされた	兼六元町、大手町	S41.2.1	味噌蔵町	
上主馬町	かみしゅめまち	藩政時代、鉄砲頭をしていた本庄主馬の邸地があったので、主馬殿町と呼ばれ、のち、この名がついた。明治4年、上・中・下主馬町等に分立した。地子町の一つ	菊川1丁目	S39.4.1	菊川	
上新町	かみしんちょう	藩政初期からの町名で、尾張町に家屋が増え、町地が狭くなったので、新しく町立てされたため、この名がついた。明治4年、上・下新町に分町した	尾張町2丁目	S45.6.1	味噌蔵町	
上鷹匠町	かみたかじょうまち	寛文2年(1662年)から、藩の鷹匠の邸地や鷹部屋がここにあったので、この名がついた。明治初期、上・中・下鷹匠町となる	石引2・4丁目	S39.4.1	小立野	
上堤町	かみつつみちょう	金沢御堂の時代にできた寺内町で、金沢御堂もしくは金沢城の時代に、土を掘り上げた堤上(後の金沢城西内惣構堀の一部)にできたことに由来するといわれている。もとは、「堤町」であったが、後に、「上堤町」、「下堤町」、「横堤町」に分かれた	高岡町、尾山町	S40.9.1/S41.2.1	松ヶ枝	H21.11.1 復活
上傳馬町	かみてんままち	藩政時代、藩用の人や荷物を運ぶために六十六匹の伝馬が置かれたことからこの名がついた。藩初は橋場町付近に置かれていたという。上・下・横・裏伝馬町等がある。地子町の一つ	片町2丁目	S40.9.1	長町	

上百々女木町	かみどどめきまち	藩政時代、木曾谷に注ぎ込む川の流れが急で、高い音をたてていたところから、ここに架けられた橋をどどめき橋と呼び、この名が町名になったという。明治4年、百々女木町、馬坂新町、集福寺門前、宝円寺門前の一部の合計77軒で成立した	石引1丁目	S39.4.1	小立野	
上中島町	かみなかじままち	中島町の町名は、当地がかつて浅野川の中洲であったことによる。地子町の一つ。明治4年、上・下中島町となる	昌永町	S41.9.1	浅野町	
上松原町	かみまつばらちよう	もと松原口門の前にあったことからこの名がついたという。藩政期には権現堂御門前町ともいい、のち、御門前松原町といったが、明治4年、上松原町となった	香林坊1丁目、尾山町	S41.2.1	松ヶ枝	
上弓ノ町	かみゆみのまち	天和のころから足軽弓組の組地で、如来寺組、経王寺組と射場があり、小立野弓ノ町と呼ばれた。明治5年、如来寺組は上弓ノ町、経王寺組は中弓ノ町に、また、横山同心組の組地は下弓ノ町となった	小立野2・5丁目	S39.4.1	小立野	
川上新町一丁目	かわかみしんまち いっちょうめ	もとの犀川の河原に堤防を築き、外側を埋め立てて新しく町地としたことによる。一丁目から三丁目があった。地子町の一つ	菊川1丁目	S39.4.1	菊川	
川上新町二丁目	かわかみしんまちに ちようめ	もとの犀川の河原に堤防を築き、外側を埋め立てて新しく町地としたことによる。一丁目から三丁目があった。地子町の一つ	菊川1丁目	S39.4.1	菊川	
川上新町三丁目	かわかみしんまちさ んちようめ	もとの犀川の河原に堤防を築き、外側を埋め立てて新しく町地としたことによる。一丁目から三丁目があった。地子町の一つ	菊川1・2丁目	S39.4.1	菊川	
河内町	かわちまち	加賀藩の老臣禄高一万七千石の奥村氏の下屋敷(家中町)があったところで、同家の当主が河内守に任ぜられたことがあり、明治2年、この名がついた。	石引1丁目	S39.4.1	小立野	
河原町	かわらまち	この付近は、もと犀川の河原で元和2年(1616年)、犀川の改修に伴って新たに作られた町の一つであるところから、はじめ、後河原町と呼ばれたが、のち、この名がつけられた。本町の一つ	片町1丁目	S41.2.1	長町	
観音町一丁目	かんのんまちいっ ちようめ	元和二年、観音院が卯辰山から移されたとき、観音院から浅野川大橋までの道を拡張し、この通りを観音町と称した	東山1丁目	S41.9.1	材木町	R15.1 復活
観音町二丁目	かんのんまちにち ようめ	元和二年、観音院が卯辰山から移されたとき、観音院から浅野川大橋までの道を拡張し、この通りを観音町と称した	東山1丁目	S41.9.1	材木町	R15.1 復活
観音町三丁目 ※一部現存	かんのんまちさん ちようめ	元和二年、観音院が卯辰山から移されたとき、観音院から浅野川大橋までの道を拡張し、この通りを観音町と称した	東山1丁目	S41.9.1	材木町	R15.1 復活
木揚場	きあげば	かつて宮越往来が当地に通っていた頃、宮越から水上輸送した材木を当地で陸揚げしたことによる。三社揚場ともいった。地子町の一つ	元菊町	S41.9.1	長田町	
木倉町	きぐらまち	藩政の初めころ、藩の材木蔵があったのでこの名がついた。もとは木町、また一時期、西側半分は出大工町とも呼ばれていた。本町の一つ	片町2丁目	S40.9.1	長町	H15.8.1 復活
木曾町	きそまち	百々女木橋から材木町へ出る谷合の町である。溪流と周りの風致が信州の木曾路に似ていることから、この名が呼ばれた。明治4年に命名された	東兼六町、扇町	S41.2.1	味噌蔵町	
北石坂新町	きたいっさかしん まち	石坂村が城下町に近いことから、早くから町場化した。明治初年に北石坂町の新町として命名された	増泉1丁目、白菊町	S42.9.1/S44. 2.1	中村町	
北石坂町	きたいっさかま ち	かつて当町は、南石坂町とともに石坂町と呼ばれたが、文政6年(1823年)南北に分かれ、町名となった。地子町の一つ	野町2丁目	S42.9.1	野町	
北長門町	きたながとまち	加賀藩士、山崎長門の邸地があったところから、はじめは長門町と呼ばれていた。文政6年(1823年)、南長門町が町立てされてから、この名になった。地子町の一つ	片町2丁目	S40.9.1	長町	
木ノ新保一番丁	きのしんぼいちばん ちよう	古くは石川郡石浦庄木の新保村で、藩政初期のころ金沢城近くの西側からこの地に移り、一帯を木ノ新保と総称した。明治4年、木ノ新保厩町が木ノ新保一番丁となった	本町1丁目、此花町	S40.9.1	此花	
木ノ新保二番丁	きのしんぼにばんち よう	古くは石川郡石浦庄木の新保村で、藩政初期のころ金沢城近くの西側からこの地に移り、一帯を木ノ新保と総称した。明治4年、木ノ新保須田町が二番丁となった	本町1・2丁目	S40.9.1	此花	

木ノ新保三番丁	きのしんぼさんばんちょう	古くは石川郡石浦庄木の新保村で、藩政初期のころ金沢城近くの西側からこの地に移り、一帯を木ノ新保と総称した。明治4年、木ノ新保糸倉町が木ノ新保三番丁となった	本町1丁目、此花町	S40.9.1	此花	
木ノ新保四番丁	きのしんぼよんばんちょう	古くは石川郡石浦庄木の新保村で、藩政初期のころ金沢城近くの西側からこの地に移り、一帯を木ノ新保と総称した。明治4年木ノ新保竹町が四番丁となった	本町2丁目、此花町、堀川町	S40.9.1	此花	
木ノ新保六番丁	きのしんぼろくばんちょう	古くは石川郡石浦庄木の新保村で、藩政初期のころ金沢城近くの西側からこの地に移り、一帯を木ノ新保と総称した。明治4年、「白髭前」が六番丁となった	本町2丁目	S40.9.1	此花・芳斎	
木町一番丁	きまちいちばんちょう	藩政のころ、材木問屋が集まっていたので、はじめ卯辰ノ木町、かつて四筋あったことから四丁木町などと呼ばれ、のち、この名がついた。地子町の一つ	東山1・2丁目	S41.9.1	馬場	
木町二番丁	きまちにばんちょう	藩政のころ、材木問屋が集まっていたので、はじめ卯辰ノ木町、かつて四筋あったことから四丁木町などと呼ばれ、のち、この名がついた。地子町の一つ	東山1・2丁目	S41.9.1	馬場	
木町三番丁	きまちさんばんちょう	藩政のころ、材木問屋が集まっていたので、はじめ卯辰ノ木町、かつて四筋あったことから四丁木町などと呼ばれ、のち、この名がついた。地子町の一つ	東山1丁目	S41.9.1	馬場	
木町四番丁	きまちよんばんちょう	藩政のころ、材木問屋が集まっていたので、はじめ卯辰ノ木町、かつて四筋あったことから四丁木町などと呼ばれ、のち、この名がついた。地子町の一つ	東山1丁目	S41.9.1	馬場	
銀杏町	ぎんなんちょう	藩士本多家の家士であった芝木氏の邸地が当地にあり、同所にはイチヨウの古木があったことに因むといわれるが、当地には芝木氏の邸地は見当たらない	桜町、暁町	S41.2.1	材木町	
九人橋下通	くにんばししたどおり	九人橋は東内惣構堀に架けられた橋で、橋番が置かれていた。十人並んで渡ると九人の影しか映らないという伝説から、橋の名がついたという。町名はここから生まれた	兼六元町	S41.2.1	味噌蔵町	
九枚町	くまいまち	加賀藩の老臣奥村氏(一万二千石)の下屋敷地であり、同家の家紋九枚笹にちなみ、明治2年、この名がつけられた	暁町	S41.2.1	味噌蔵町	
賢坂辻通	けんさかつじどおり	藩政時代は、小姓町と称されているように平土屋敷を中心とした武家町であった。町名は久保市神社の氏子圏の南東境であったことから、剣崎辻とも剣先辻と呼ばれ、明治4年、町名となった	小将町、兼六元町	S41.2.1	味噌蔵町	
玄蕃町一番丁	げんばまちいちばんちょう	加賀藩重臣、津田玄蕃(禄高1万石)の下屋敷があったところで、明治2年、この名がつけられた。一番丁、二番丁、三巡りの3つに分かれた	材木町	S41.2.1	材木町	
玄蕃町二番丁	げんばまちにばんちょう	加賀藩重臣、津田玄蕃(禄高1万石)の下屋敷があったところで、明治2年、この名がつけられた。一番丁、二番丁、三巡りの3つに分かれた	橋場町、材木町	S41.2.1	材木町	
玄蕃町三巡り	げんばまちみつめぐり	加賀藩重臣、津田玄蕃(禄高1万石)の下屋敷があったところで、明治2年、この名がつけられた。一番丁、二番丁、三巡りの3つに分かれた	橋場町	S41.2.1	材木町	
高儀町	こうぎまち	もと寺地などであったが、藩政前期に藩用地とし藩士の屋敷などを置いたので、公儀町と呼ばれ、文政6年(1823年)公儀の文字をはばかり、この名に改められたという。地子町の一つ	長土堀2・3丁目	S40.9.1	長土堀	
五十人町	ごじゅうにんまち	藩政前期、加賀藩士小幡宮内の下屋敷があったが、のち、足軽五十人の組地となったので、この名がついた	白菊町、千日町	S44.2.1	中村町	
小尻谷町	こじりだにまち	坂の町であり、この坂が尻谷坂(尻垂坂)より小さく、小尻谷坂と呼ばれたことによる。明治4年頃に町名がつけられた	東兼六町	S41.2.1	味噌蔵町	
児玉小路	こだましょうじ	稲荷社の上から材木町に通じる小路で、藩士児玉氏の屋敷地があったことから、名付けられた	橋場町	S41.2.1	材木町	
五寶町	ごぼうまち	西末寺(浄土真宗本願寺派別院)の門前で、藩政時代は西末寺町、西御坊町とも呼ばれていたが、明治4年、この名に改められた	安江町、笠市町、瓢箪町	S40.9.1	瓢箪町	
犀川下川除町	さいがわしもかわよけまち	寛政7年(1795年)、川除町のうち、宝久寺辺りから大豆田の町端までを犀川川除町とし、上川除、下川除、中川除などとした。地子町の一つ	片町2丁目、中央通町	S40.9.1	長町	

栄町	さかえまち	藩政時代、人持組深美氏の邸宅があったので、深美小路と呼ばれた。明治4年、諸氏の邸宅が商家となり、繁昌を願って栄町と称した	武蔵町	S45.6.1	松ヶ枝	
桜木一の小路	さくらぎいちのしょうじ	一から十の小路がある。町名は犀川河岸一帯にかけて桜の木が植えられていたことによるとも、泉野村の桜木神社の社名ともいわれる。元泉野村の地で藩政期末までは越中屋小路・玄光院通りと呼ばれていた	寺町1・2丁目	S38.6.1	泉野	
桜木二の小路	さくらぎにのしょうじ	一から十の小路がある。町名は犀川河岸一帯にかけて桜の木が植えられていたことによるとも、泉野村の桜木神社の社名ともいわれる。元泉野村の地で藩政期末までは越中屋小路・玄光院通りと呼ばれていた	寺町2丁目	S38.6.1	泉野	
桜木三の小路	さくらぎさんのしょうじ	一から十の小路がある。町名は犀川河岸一帯にかけて桜の木が植えられていたことによるとも、泉野村の桜木神社の社名ともいわれる。元泉野村の地で藩政期末までは越中屋小路・玄光院通りと呼ばれていた	寺町2丁目	S38.6.1	泉野	
桜木四の小路	さくらぎよんのしょうじ	一から十の小路がある。町名は犀川河岸一帯にかけて桜の木が植えられていたことによるとも、泉野村の桜木神社の社名ともいわれる。元泉野村の地で藩政期末までは越中屋小路・玄光院通りと呼ばれていた	寺町2丁目	S38.6.1	泉野	
桜木五の小路	さくらぎごのしょうじ	一から十の小路がある。町名は犀川河岸一帯にかけて桜の木が植えられていたことによるとも、泉野村の桜木神社の社名ともいわれる。元泉野村の地で藩政期末までは越中屋小路・玄光院通りと呼ばれていた	寺町2丁目	S38.6.1	泉野	
桜木六の小路	さくらぎろくのしょうじ	一から十の小路がある。町名は犀川河岸一帯にかけて桜の木が植えられていたことによるとも、泉野村の桜木神社の社名ともいわれる。元泉野村の地で藩政期末までは越中屋小路・玄光院通りと呼ばれていた	寺町2丁目	S38.6.1	泉野	
桜木七の小路	さくらぎななのしょうじ	一から十の小路がある。町名は犀川河岸一帯にかけて桜の木が植えられていたことによるとも、泉野村の桜木神社の社名ともいわれる。元泉野村の地で藩政期末までは越中屋小路・玄光院通りと呼ばれていた	寺町2・4丁目、泉野町2丁目	S38.6.1	泉野	
桜木八の小路	さくらぎはちのしょうじ	一から十の小路がある。町名は犀川河岸一帯にかけて桜の木が植えられていたことによるとも、泉野村の桜木神社の社名ともいわれる。元泉野村の地で藩政期末までは越中屋小路・玄光院通りと呼ばれていた	寺町2丁目	S38.6.1	泉野	
桜木九の小路	さくらぎきゅうのしょうじ	一から十の小路がある。町名は犀川河岸一帯にかけて桜の木が植えられていたことによるとも、泉野村の桜木神社の社名ともいわれる。元泉野村の地で藩政期末までは越中屋小路・玄光院通りと呼ばれていた	寺町2丁目	S38.6.1	泉野	
桜木十の小路	さくらぎじゅうのしょうじ	一から十の小路がある。町名は犀川河岸一帯にかけて桜の木が植えられていたことによるとも、泉野村の桜木神社の社名ともいわれる。元泉野村の地で藩政期末までは越中屋小路・玄光院通りと呼ばれていた	寺町2丁目	S38.6.1	泉野	
桜畠一番丁	さくらばたけいちばんちょう	一番丁から十番丁までである。町名の由来は、一帯に桜が植えられていたことによるといわれているが、桜のほか、柿、栗、ブドウ、椿なども植えられていたという。古くは泉野村の荒地であった	寺町1丁目	S38.6.1	泉野	
桜畠二番丁	さくらばたけにばんちょう	一番丁から十番丁までである。町名の由来は、一帯に桜が植えられていたことによるといわれているが、桜のほか、柿、栗、ブドウ、椿なども植えられていたという。古くは泉野村の荒地であった	寺町1・3丁目	S38.6.1	泉野	
桜畠三番丁	さくらばたけさんばんちょう	一番丁から十番丁までである。町名の由来は、一帯に桜が植えられていたことによるといわれているが、桜のほか、柿、栗、ブドウ、椿なども植えられていたという。古くは泉野村の荒地であった	寺町3丁目	S38.6.1	泉野	

桜畠四番丁	さくらばたけよんばんちょう	一番丁から十番丁までである。町名の由来は、一帯に桜が植えられていたことによるといわれているが、桜のほかにも、柿、栗、ブドウ、椿なども植えられていたという。古くは泉野村の荒地であった	寺町3丁目	S38.6.1	泉野	
桜畠五番丁	さくらばたけごばんちょう	一番丁から十番丁までである。町名の由来は、一帯に桜が植えられていたことによるといわれているが、桜のほかにも、柿、栗、ブドウ、椿なども植えられていたという。古くは泉野村の荒地であった	寺町3丁目	S38.6.1	泉野	
桜畠六番丁	さくらばたけろくばんちょう	一番丁から十番丁までである。町名の由来は、一帯に桜が植えられていたことによるといわれているが、桜のほかにも、柿、栗、ブドウ、椿なども植えられていたという。古くは泉野村の荒地であった	寺町3丁目	S38.6.1	泉野	
桜畠七番丁	さくらばたけななばんちょう	一番丁から十番丁までである。町名の由来は、一帯に桜が植えられていたことによるといわれているが、桜のほかにも、柿、栗、ブドウ、椿なども植えられていたという。古くは泉野村の荒地であった	寺町3丁目	S38.6.1	泉野	
桜畠八番丁	さくらばたけはちばんちょう	一番丁から十番丁までである。町名の由来は、一帯に桜が植えられていたことによるといわれているが、桜のほかにも、柿、栗、ブドウ、椿なども植えられていたという。古くは泉野村の荒地であった	寺町3丁目	S38.6.1	泉野	
桜畠九番丁	さくらばたけきゅうばんちょう	一番丁から十番丁までである。町名の由来は、一帯に桜が植えられていたことによるといわれているが、桜のほかにも、柿、栗、ブドウ、椿なども植えられていたという。古くは泉野村の荒地であった	寺町3丁目	S38.6.1	泉野	
桜畠十番丁	さくらばたけじゅうばんちょう	一番丁から十番丁までである。町名の由来は、一帯に桜が植えられていたことによるといわれているが、桜のほかにも、柿、栗、ブドウ、椿なども植えられていたという。古くは泉野村の荒地であった	寺町3丁目、清川町	S38.6.1/S39.4.1	泉野	
笹下町一の小路	ささかまちいちのしょうじ	一から三の小路がある。もと泉野村の地にあたり一帯が竹藪であったことからこの名がついたという。笹ヶ町とも書いた。地子町の一つ	寺町5丁目	S42.9.1	野町	
笹下町二の小路	ささかまちにのしょうじ	一から三の小路がある。もと泉野村の地にあたり一帯が竹藪であったことからこの名がついたという。笹ヶ町とも書いた。地子町の一つ	寺町5丁目	S42.9.1	野町	
笹下町三の小路	ささかまちさんのしょうじ	一から三の小路がある。もと泉野村の地にあたり一帯が竹藪であったことからこの名がついたという。笹ヶ町とも書いた。地子町の一つ	寺町5丁目、野町3丁目	S42.9.1	野町	
醒ヶ井町	さめがいちょう	藩政時代は北広岡村領の請地で、前田土佐守の下屋敷(家中町)があった。目の醒めるようなきれいな水の井戸があったことから、明治3年、町名となった	広岡2丁目	S61.2.1	長田町	
三間道	さんげんみち	三軒道とも書く。町名の由来は、家が三軒あったことによる。地子町の一つ	野町1・3丁目	S42.9.1	野町	
三社五十人町	さんじゃごじゅうにんまち	藩政時代、この地に足軽五十人組の組地の一つがあり、三社にあったことから、これを冠称しこの名がついた	長土塀2丁目、芳斉1丁目、三社町	S40.9.1	長土塀	
三十人町	さんじゅうにんまち	三十人組組地があったことに由来する。三十人組とは、鎗持、草履取などを職とする小者の組で30人を単位に一組を形成していた。明治4年に町立てされた	天神町2丁目	S41.2.1	味噌蔵町	
地黄煎町	じおうせんまち	藩政初期、泉野新村から発達した町で、地黄という薬草を採取して地黄煎という飴薬を売り出したことから、この名がついた。文政4年(1821年)、一町として町立てされた。地子町の一つ	泉野町4・6丁目、泉が丘1・2丁目	S38.6.1/S42.9.1	泉野・弥生	
塩川町	しおがわまち	加賀藩士、塩川氏の屋敷があったところなので、この名がつけられた。地子町の一つ	長町2丁目、中央通町	S40.9.1	長町	
塩屋町	しおやまち	町名の由来は、能登塩を扱う塩問屋があったことによる。藩政初期には、大手門付近にあったが、寛永年間(1624～44)に現在地に移転したという。本町の一つ	瓢箪町	S40.9.1	瓢箪町	

品川町	しながわまち	加賀藩士品川氏の邸地があったところなので、この名がつけられた。地子町の一つ	天神町2丁目	S41.2.1	味噌蔵町	
島田町	しまだまち	藩政の初期から元禄のころまで当地に島田勘兵衛の屋敷があったが、その後邸地を返上、島田勘兵衛上地町と呼ばれ、享保の町絵図では島田町と記されている	本町2丁目、昭和町	S40.9.1	芳齋	
下安藤町	しもあんどうまち	藩政時代、鉄砲組の足軽頭、安藤長左衛門の組地があったので、この名がついたという。明治3年、上・中・下の3つの安藤町に分立した	石引1丁目・3丁目、宝町	S39.4.1	小立野	
下石伐町	しもいしきりまち	戸室山から石を伐り出す藩の石伐職人二十人の組地があったことによる。延宝年間(1673~81)に上、下石伐町に分立した。地子町の一つ	清川町	S39.4.1	新竪町	
下石引町	しもいしびきまち	藩政の初め、金沢城の石垣を築くため、戸室山から切り出した戸室石を引いて運んだ道筋であったので、この名がついたという。上・中・下石引町があった。いしびきちょうとも呼ばれた	石引3・4丁目	S39.4.1	小立野	H12.4.1 復活
下小川町	しもおがわちよう	藩政時代は、川(河)端町、西養寺町前、誓願寺前、玄門寺前などのまちであったが、小川に沿ったまちなので、明治4年、上・下小川町に改められた	東山2丁目	S41.9.1	馬場	
下小柳町	しもおやなぎまち	町名はかつてこの辺りが荒地であった頃、柳の木があったことによるといわれているが、不詳。文政6年(1823年)、上・下小柳町に分立。地子町の一つ	野町2丁目	S42.9.1	野町	
下欠原町	しもがけはらまち	崖縁の通りであるため、藩政時代は笠舞がけ原、がけ片原などと呼ばれていたが、のち、略してこの名がついた。明治4年、上・中・下欠原町となった。地子町の一つ	本多町3丁目	S39.4.1	新竪町	
下胡桃町	しもくるみちよう	この地の東惣構堀にかかる橋を、橋詰の染師黒梅屋の名によって黒梅橋といったが、俗にくるみ橋と呼んだことから、明治4年この名で町立てされた	大手町	S41.2.1	味噌蔵町	
下高儀町	しもこうぎまち	もと寺地などであったが、藩政前期に藩用地とし藩士の屋敷などを置いたので、公儀町と呼ばれ、文政6年(1823年)、公儀の文字をはばかり、この名に改められたという	長土塀2・3丁目	S40.9.1	長土塀	
下主馬町	しもしゅめまち	藩政時代、鉄砲頭をしていた本庄主馬の邸地があったので、主馬殿町と呼ばれ、明治4年、町名となった	菊川2丁目、幸町	S39.4.1	菊川	
下新町	しもしんちよう	藩政初期からの町名で、尾張町に家屋が増え、町地が狭くなったので、新しく町立てされたため、新町の名がついた。明治4年、上・下の2町に分町した	尾張町2丁目	S45.6.1	味噌蔵町	H21.11.1 復活
下傳馬町	しもてんままち	藩政時代、藩用の人や荷物を運ぶために六十六匹の伝馬が置かれたことからこの名がついた。伝馬・馬借の居住地があり、厩舎があったことによる。伝馬町は、上・下・後・横伝馬町が伝馬町であった。藩初は橋場町付近に置かれていたという	中央通町	S40.9.1	長町	
下百々女木町	しもどどめきまち	藩政時代、木曾谷に注ぎ込む川の流が急で、高い音をたてていたところから、ここに架けられた橋をどどめき橋と呼び、この名が町名になったという。明治5年、宝円寺町を改称して下百々女木町となった	宝町	S39.4.1	小立野	
下中島町	しもなかじままち	中島町の町名は、当地がかつて浅野川の中洲であったことによる。地子町の一つ。明治4年、上・下中島町となる	昌永町、京町	S41.9.1	浅野町	
下弓ノ町	しもゆみのまち	天和のころから足軽弓組の組地で、如来寺組、経王寺組と射場があり、小立野弓ノ町と呼ばれた。明治5年、如来寺組は上弓ノ町、経王寺組は中弓ノ町に、また、横山同心組の組地は下弓ノ町となった	小立野5丁目	S39.4.1	小立野	
主馬町広丁	しゅめまちひろちよう	藩政時代、鉄砲頭をしていた本庄主馬の邸地があったので、主馬殿町と呼ばれ、明治4年、この名がついた	菊川2丁目	S39.4.1	菊川	
白山町	しらやまちよう	藩政時代、波着寺門前と呼ばれていたが、波着寺の山号が白山であるところから、明治4年、この名に改められた	石引2丁目	S39.4.1	小立野	
白銀町	しろがねちよう	藩政初期は安江村であった。町地が広がったため安江木町となり、その一角に白銀細工師がいたため町名になったという。地子町の一つ	本町1・2丁目、玉川町、武蔵町	S40.9.1/S45.6.1	芳齋	

新川除町	しんかわよけまち	寛政7年(1795年)、川除町のうち、宝久寺辺りから大豆田の町端までを犀川川除町とした。明治からは、新川除町と称した。地子町の一つ	中央通町、長土堀3丁目	S40.9.1	長土堀	
新坂町	しんさかまち	小立野台地から犀川方面へ降りる坂はいくつもあるが、嫁坂の次に開かれたので、新坂という。地子町の一つ	石引2・4丁目、本多町1丁目	S39.4.1	小立野	
新竪町一丁目	しんたてまちいちちょうめ	竪町の後に成立し、竪町に続く通りであったことによる。元和2年(1616年)頃、埋立てて町をつつたので、竪河原町と称した。寛文12年(1672年)には新立町、享保の頃には上竪町と呼んだ。文政6年(1823年)、一丁目から三丁目に分立した	菊川2丁目、幸町	S39.4.1	新竪町	
新竪町二丁目	しんたてまちにちょうめ	竪町の後に成立し、竪町に続く通りであったことによる。元和2年(1616年)頃、埋立てて町をつつたので、竪河原町と称した。寛文12年(1672年)には新立町、享保の頃には上竪町と呼んだ。文政6年(1823年)、一丁目から三丁目に分立した	幸町	S39.4.1	新竪町	
新長柄町	しんながえまち	藩政のころ、参勤交代のときなどに長柄の槍を持つ人達が住んでいたため、この名がついた。長柄町の北に接して町立てした	菊川1・2丁目	S39.4.1	菊川	
助九郎町	すけくろうまち	藩政時代、本間助九郎または葛巻助九郎の邸地があったので、この名がついたという。地子町の一つ	野町2丁目	S42.9.1	野町	
仙石町	せんごくまち	千石町とも書いた。藩政初期からの町名であるが、その由来は明らかではない。地子町の一つ	香林坊1丁目、広坂2丁目、尾山町	S41.2.1	新竪町	
仙人町	せんになまち	明治3年の町立て、町名の由来は不詳だが「こんな荒れたところに住むのは仙人しか居ないから仙人町としたらいい」と命名されてという。千人町とも書いた	清川町	S39.4.1	菊川	
象眼町	ぞうがねまち	藩政時代、地子町の一つで、象嵌師が住んでいたことからこの名がついた。「ずがねまち」とも「ぞうがんまち」ともいった	笠市町、安江町	S40.9.1	瓢箪町	
宗叔町二番丁	そうしゅくちょうにばんちょう	元禄のころ堀宗叔という医師が住んでいたためこの名がついた。堀家は代々藩医をつとめていた。一番丁から五番丁までであった。地子町の一つ	玉川町、芳齋1丁目	S40.9.1	芳齋	
宗叔町三番丁	そうしゅくちょうさんばんちょう	元禄のころ堀宗叔という医師が住んでいたためこの名がついた。堀家は代々藩医をつとめていた。一番丁から五番丁までであった。地子町の一つ	玉川町、芳齋1・2丁目	S40.9.1	芳齋	
宗叔町四番丁	そうしゅくちょうよんばんちょう	元禄のころ堀宗叔という医師が住んでいたためこの名がついた。堀家は代々藩医をつとめていた。一番丁から五番丁までであった。地子町の一つ	玉川町、芳齋2丁目	S40.9.1	芳齋	
宗叔町五番丁	そうしゅくまちごばんちょう	元禄のころ堀宗叔という医師が住んでいたためこの名がついた。堀家は代々藩医をつとめていた。一番丁から五番丁までであった。地子町の一つ	玉川町	S40.9.1	芳齋	
大工町	だいくまち	寛永の大火のあと、ここに拝領地を受けて藩の御大工衆が住んだことからこの名がついた	片町1丁目(一部)	S41.2.1	長町	
大衆免竪町	だいじゅめたてまち	大衆目、大志目、大衆免とも書く。地名は当地一帯が二条家領の小坂荘であった時、当地は春日神社の別当寺であった神宮寺の大衆領の作田地として諸役が免許されていたことに由来する。明治初年には大衆免を冠する町が十八あった	森山1丁目	S41.9.1	森山	
大衆免中通	だいじゅめなかどおり	文政6年(1823年)成立。町名は金屋町から大衆免の地域に入る中央の道筋に当たるため、このように呼ばれた。一時期、大衆免を冠していた。大衆目、大志目、大衆免とも書く。地名は当地一帯が二条家領の小坂荘であった時、当地は春日神社の別当寺であった神宮寺の大衆領の作田地として諸役が免許されていたことに由来する。明治初年には大衆免を冠する町が十八あった。地子町の一つ	森山1丁目	S41.9.1	森山	
大衆免七曲り	だいじゅめななまがり	大衆目、大志目、大衆免とも書く。地名は当地一帯が二条家領の小坂荘であった時、当地は春日神社の別当寺であった神宮寺の大衆領の作田地として諸役が免許されていたことに由来する。明治初年には大衆免を冠する町が十八あった	森山1丁目	S41.9.1	森山	
大衆免横町	だいじゅめよこまち	大衆目、大志目、大衆免とも書く。地名は当地一帯が二条家領の小坂荘であった時、当地は春日神社の別当寺であった神宮寺の大衆領の作田地として諸役が免許されていたことに由来する。明治初年には大衆免を冠する町が十八あった	森山1丁目	S41.9.1	森山	
台所町一番丁	だいでところまちいちばんちょう	藩政時代、この地に台所付足軽屋敷などの組地があったことから、この名がついた。一番丁から七番丁までであった	城南2丁目	S39.4.1	菊川	

台所町二番丁	だいどころまちにばんちょう	藩政時代、この地に台所付足軽屋敷などの組地があったことから、この名がついた。一番丁から七番丁までであった	城南2丁目、菊川1丁目	S39.4.1	菊川	
台所町三番丁	だいどころまちさんばんちょう	藩政時代、この地に台所付足軽屋敷などの組地があったことから、この名がついた。一番丁から七番丁までであった	菊川1丁目	S39.4.1	菊川	
台所町四番丁	だいどころまちよんばんちょう	藩政時代、この地に台所付足軽屋敷などの組地があったことから、この名がついた。一番丁から七番丁までであった	菊川1丁目	S39.4.1	菊川	
台所町五番丁	だいどころまちごばんちょう	藩政時代、この地に台所付足軽屋敷などの組地があったことから、この名がついた。一番丁から七番丁までであった	菊川1丁目	S39.4.1	菊川	
台所町六番丁	だいどころまちろくばんちょう	藩政時代、この地に台所付足軽屋敷などの組地があったことから、この名がついた。一番丁から七番丁までであった	菊川1丁目	S39.4.1	菊川	
台所町七番丁	だいどころまちななばんちょう	藩政時代、この地に台所付足軽屋敷などの組地があったことから、この名がついた。一番丁から七番丁までであった	菊川1丁目	S39.4.1	菊川	
高道新町	たかみちしんまち	藩政初期の北陸道は、現道路(国道159号)より西側の低い所にあったが、その後、新しく山側の高い所に道ができ(現在の国道159号)、その道を「高道」と呼び、その界隈の町を高道町といった。高道新町は明治4年に成立した	山の上町	S41.9.1	森山	
高道町	たかみちまち	藩政初期の北陸道は、現道路(国道159号)より西側の低い所にあったが、その後、新しく山側の高い所に道ができ(現在の国道159号)、その道を「高道」と呼び、その界隈の町を高道町といった。地子町の一つ	東山2丁目、山の上町、森山1丁目	S41.9.1	森山	
竹田町	たけだまち	加賀藩士禄高三千五百三十石の竹田氏の下屋敷(家中町)があったところなので、明治2年、この名がついた	長土堀3丁目	S40.9.1	長土堀	
立川町	たつがわちょう	一時期、大衆免を冠していた。大衆目、大志目、大衆免とも書く。地名は当地一帯が二条家領の小坂荘であった時、当地は春日神社の別当寺であった神宮寺の大衆領の作田地として諸役が免許されていたことに由来する。明治初年には大衆免を冠する町が十八あった。文政6年(1823年)町立てされた	森山1・2丁目、東山3丁目	S41.9.1	森山	
谷町	たにまち	加賀藩士神谷氏の邸地だったので、神谷町と称したことに因むという。文政6年(1823年)、神谷町の一部から分立、町立てした。町名は神谷町の略称といわれる。地子町の一つ	長土堀2丁目	S40.9.1	長土堀	
田町	たまち	当地はもと田井村領であったことから、町地となった時に、田町と称したものという。地子町の一つ	天神町2丁目、暁町、桜町	S41.2.1	味噌蔵町	
田町新道	たまちしんみち	文政6年(1823年)、田井新町を改称してできた。地子町の一つ	天神町1・2丁目、桜町	S41.2.1	味噌蔵町	
玉井町	たまのいまち	加賀藩士禄高五千石の玉井氏の屋敷と同家の下屋敷・家中町があったところで、明治の初め、この名がついた	本町2丁目、昭和町	S40.9.1	芳齋	
田丸町	たまるまち	加賀藩士、田丸兵庫が藩政初期に住んでいたところで、兵庫は寛永期大聖寺藩に仕えたので、田丸兵庫上ヶ地町と呼ばれていた。のち、略してこの名がついた。地子町の一つ	本町1・2丁目、昭和町	S40.9.1	芳齋	
茶畠一の小路	ちゃばたけいちのしょうじ	この地は、もと泉野村領で、藩政時代に茶の木を多く植えたので、この名で呼ばれたという。一の小路、二の小路がある	寺町4丁目	S38.6.1	泉野	
茶畠二の小路	ちゃばたけにのしょうじ	この地は、もと泉野村領で、藩政時代に茶の木を多く植えたので、この名で呼ばれたという。一の小路、二の小路がある	寺町4丁目	S38.6.1	泉野	
鳶町	つたまち	加賀藩士禄高七千六百五十石の青山氏の下屋敷(家中町)があったところで、同家の家紋「丸の内鳶」にちなみ、明治4年この名がついた	三社町、元菊町	S40.9.1/S41.9.1	長土堀	
土取場城端町	つちとりばじょうはなまち	藩政前期から、このあたりの土を取って瓦を焼いたところからこの名がついたといわれ、また、土居や堤防を築くときにもつかわれたといわれる。文政6年(1823年)、土取場を冠する町が八町あった。地子町の一つ。明治4年から合併して三町になった	石引1丁目	S39.4.1	小立野	
土取場永町	つちとりばながまち	藩政前期から、このあたりの土を取って瓦を焼いたところからこの名がついたといわれ、また、土居や堤防を築くときにもつかわれたといわれる。文政6年(1823年)、土取場を冠する町が八町あった。地子町の一つ。明治4年から合併して三町になった	石引1丁目、宝町	S39.4.1	小立野	

手木町	てこのまち	藩政時代、城中の露地方として庭造りをしたり、藩主の行列の際に荷物を運搬する手木足軽の組地であったので、お手木町、御手木ノ町と称され、明治4年、手木町となった。	本多町1丁目	S39.4.1	菊川	
同心町	どうしんまち	明治2年、多賀左近付同心組地が町立てされた時の命名	小金町、春日町	S41.9.1	森山	
殿町	とのまち	もとは十間町の地内にあり、藩政期には、その中の武家地を殿町、町地を十間町と呼んだことからの遺名といわれる。地子町の一つ	大手町、尾張町1丁目	S41.2.1/S45.6.1	味噌蔵町	
飛梅町	とびうめちょう	前田対馬守長種にはじまる藩の老臣一万八千石前田氏の下屋敷(家中町)があったところで、同家の家紋「角の内梅輪」にちなみ、明治2年、この名がつけられた	石引3丁目、東兼六町	S39.4.1/S41.2.1	小立野	H12.4.1 復活
富本町	とみもとちょう	文政6年(1823年)に法船寺町から分立し、町内に鑄屋小路も含まれていた。明治4年、広小路と等雲寺門前を合併する。町名の由来は不詳。地子町の一つ	中央通町、長土堀3丁目、長町2丁目	S40.9.1	長土堀	
巴町	ともえまち	加賀藩士伴八矢の下屋敷(家中町)があったところで、その家紋「左三つ巴」にちなんで、明治2年、この名がついた。	笠市町、安江町	S40.9.1	瓢箪町	
豊国町	とよくにまち	観音山下町が改称されたもの。豊国神社社殿の麓にあったことから、明治元年、この名がついた	東山1丁目	S41.9.1	材木町	
中安藤町	なかあんどうまち	藩政時代、鉄砲組頭、安藤長左衛門の組地があったので、この名がついたという。明治3年、上・中・下の安藤町があった	石引1丁目	S39.4.1	小立野	
中石引町	なかいしびきまち	藩政の初め、金沢城の石垣を築くため、戸室山から切り出した戸室石を引いて運んだ道筋であったので、この名がついたという。上・中・下石引町があった。いしびきちょうとも呼ばれた	石引1～4丁目	S39.4.1	小立野	
長柄町	ながえまち	藩政のころ、参勤交代のときなどに長柄の槍を持つ人の組地があったので、この名がついた	菊川1丁目	S39.4.1	菊川	
中欠原町	なかがけはらまち	崖縁の通りであるため、藩政時代は笠舞がけ原、がけ片原などと呼ばれていたが、のち、略してこの名がついた。明治4年、上・中・下欠原町となった。地子町の一つ	石引2・4丁目、本多町1・2丁目	S39.4.1	小立野	
中主馬町	なかしゅめまち	藩政時代、鉄砲頭をしていた本庄主馬の邸地があったので、主馬殿町と呼ばれ、明治4年、この名がついた	菊川1・2丁目	S39.4.1	菊川	
中鷹匠町	なかたかじょうまち	寛文2年(1662年)から、藩の鷹匠組の邸地や鷹部屋がここにあったので、この名がついた。明治4年、上・中・下の鷹匠町となる	石引4丁目	S39.4.1	小立野	
中野町一番丁	なかのまちいちばんちょう	もとは犀川の河原。文政6年(1823年)に町立てされた地子町。それまでも俗称として中野町と呼ばれていた。明治4年、一番丁から三番丁となった	城南2丁目	S39.4.1	菊川	
中野町二番丁	なかのまちにばんちょう	もとは犀川の河原。文政6年(1823年)に町立てされた地子町。それまでも俗称として中野町と呼ばれていた。明治4年、一番丁から三番丁となった	城南2丁目	S39.4.1	菊川	
中野町三番丁	なかのまちさんばんちょう	もとは犀川の河原。文政6年(1823年)に町立てされた地子町。それまでも俗称として中野町と呼ばれていた。明治4年、一番丁から三番丁となった	城南2丁目	S39.4.1	菊川	
中牧町	なかまきちょう	一時期、大衆免を冠していた。大衆目、大志目、大衆免とも書く。地名は当地一帯が二条家領の小坂荘であった時、当地は春日神社の別当寺であった神宮寺の大衆領の作田地として諸役が免許されていたことに由来する。明治初年には大衆免を冠する町が十八あった。地子町の一つ	森山1・2丁目	S41.9.1	森山	
中町	なかまち	藩政初期、金沢城大手門から出る本通りの町だったのでこの名で呼ばれ、本町のひとつとして重んじられた	大手町、尾張町1丁目	S41.2.1/S45.6.1	味噌蔵町	
中弓ノ町	なかゆみのまち	天和のころから足軽弓組の組地で、如来寺組、経王寺組と射場があり、小立野弓ノ町と呼ばれた。明治5年、如来寺組は上弓ノ町、経王寺組は中弓ノ町に、また、横山同心組の組地は下弓ノ町となった	小立野5丁目	S39.4.1	小立野	
長良町	ながらまち	町名は長柄衆の住宅が建てられていたことによる。長柄衆は藩主の行列に携える長柄鎗を持つ人のことで、明治4年、町名になった。地子町の一つ	寺町1丁目	S38.6.1	泉野	

七曲り	ななまがり	藩政時代、加賀藩土村井氏の家中と同じく、今枝氏の家中の屋敷地で、道路の屈曲が多かったためという。三社七曲がりともいった	長土堀2丁目	S40.9.1	長土堀	
並木下町	なみきしたまち	藩政時代、浅野川の護岸のために川沿いに植えられた松並木にちなんで、この名がついたという。明治5年、町名となった。地子町の一つ	材木町	S41.2.1	材木町	
並木町	なみきまち	藩政時代、浅野川の護岸のために川沿いに植えられた松並木にちなんで、この名がついたという。明治5年、町名となった。地子町の一つ	材木町、橋場町	S41.2.1	材木町	H17.10.1 復活
成瀬町	なるせまち	加賀藩重臣、成瀬氏邸地があったのでこの名がついた。昔は高石垣の上に楼門、長屋などがあり、俗に加賀の小城と呼ばれた。明治2年町名となった	東兼六町	S41.2.1	味噌蔵町	
西側町	にしがわちよう	地子町であった「千日町末新」が明治3年、西側町と改名した	中村町、御影町、千日町	S42.9.1/S44.2.1	中村町	
西町一番丁	にしちよういちばんちよう	金沢御坊の西にできたのでこの名がついたといわれ、のち尾山城(金沢城)になってからできたという説もある。佐久間盛政が金沢御坊を攻め取って西町口を城の大手とした。文政6年(1823年)、不明御門より十間町石橋を西町とした。一番丁から四番丁があった	丸の内、尾山町	S39.4.1/S41.2.1	松ヶ枝	
西町二番丁	にしちようにばんちよう		尾山町	S41.2.1	松ヶ枝	
西馬場町	にしばばまち	犀川馬場先と犀川馬場前が合併して、明治4年、西馬場町となる	中央通町、長土堀3丁目	S40.9.1	長土堀	
二十人町一番丁	にじゅうにんまちいちばんちよう	藩政のころ、鉄砲足軽二十人をこの地に住ませたことから、小立野二十人町、小立野足軽町二十人町などと呼ばれた。明治4年、付近の町を加えて二十人町となった。一番丁から五番丁まであった	石引2丁目	S39.4.1	小立野	
二十人町二番丁	にじゅうにんまちにばんちよう	藩政のころ、鉄砲足軽二十人をこの地に住ませたことから、小立野二十人町、小立野足軽町二十人町などと呼ばれた。明治4年、付近の町を加えて二十人町となった。一番丁から五番丁まであった	石引2丁目	S39.4.1	小立野	
二十人町三番丁	にじゅうにんまちさんばんちよう	藩政のころ、鉄砲足軽二十人をこの地に住ませたことから、小立野二十人町、小立野足軽町二十人町などと呼ばれた。明治4年、付近の町を加えて二十人町となった。一番丁から五番丁まであった	石引2丁目	S39.4.1	小立野	
二十人町四番丁	にじゅうにんまちよんばんちよう	藩政のころ、鉄砲足軽二十人をこの地に住ませたことから、小立野二十人町、小立野足軽町二十人町などと呼ばれた。明治4年、付近の町を加えて二十人町となった。一番丁から五番丁まであった	石引2丁目	S39.4.1	小立野	
沼田町	ぬまだまち	もと石川郡泉野村の地内であったが、文政6年(1823年)町立てされた。もとは沼地であったことから、この名がついたといわれる。地子町の一つ	寺町4丁目、泉野町3丁目、野町3丁目	S38.6.1/S42.9.1	野町	
八幡町	はちまんまち	卯辰八幡宮が、慶長4年から明治6年まで宇多須神社の地にあったので、社号からこの名がついた	東山1・2丁目	S41.9.1	馬場	
八坂	はっさか	小立野台地から扇町に至る坂道で木こりの通路が8つあったことによるという。伊予殿坂とも宝幢寺坂ともいう。地子町の一つ	東兼六町、小将町	S41.2.1	味噌蔵町	
英町	はなぶさちよう	もと安江木町の一部で、町内に英田広済寺があったことから、文政6年(1823年)、町名改めるとき「英」の一字を用いて町名とした。地子町の一つ	芳齊2丁目、本町2丁目	S40.9.1	芳齋	
馬場一番丁	ばばいちばんちよう	浅野川馬場または関助町とも呼ばれた。藩士達の馬場があったことに由来する。一番丁から六番丁まであった	東山3丁目	S41.9.1	馬場	
馬場二番丁	ばばにばんちよう	浅野川馬場または関助町とも呼ばれた。藩士達の馬場があったことに由来する。一番丁から六番丁まであった	東山3丁目	S41.9.1	馬場	
馬場三番丁	ばばさんばんちよう	浅野川馬場または関助町とも呼ばれた。藩士達の馬場があったことに由来する。一番丁から六番丁まであった	東山3丁目	S41.9.1	馬場	
馬場四番丁	ばばよんばんちよう	浅野川馬場または関助町とも呼ばれた。藩士達の馬場があったことに由来する。一番丁から六番丁まであった	東山3丁目	S41.9.1	馬場	
馬場五番丁	ばばごばんちよう	浅野川馬場または関助町とも呼ばれた。藩士達の馬場があったことに由来する。一番丁から六番丁まであった	東山3丁目、小橋町	S41.9.1	馬場	

馬場六番丁	ばばろくばんちょう	浅野川馬場または関助町とも呼ばれた。藩士達の馬場があったことに由来する。一番丁から六番丁までであった	小橋町	S41.9.1	馬場	
馬場崎町	ばばさきちょう	藩政時代、藩の老臣横山氏上屋敷の馬場の横通りを馬場先と呼んでいたことから、明治4年町名となった	桜町、暁町、横山町	S41.2.1	材木町	
蛤坂新道	はまぐりざかしんみち	享保18年(1733年)大火の後、新しく道路を造成したため、焼けた蛤が口を開いたようだと、人々は蛤坂と俗称した。それまでは妙慶寺坂であった。明治元年に新道が造られ、家が建てられた為に町名となった	清川町	S39.4.1	新竪町	
蛤坂町	はまぐりざかまち	享保18年(1733年)大火の後、新しく道路を造成したため、焼けた蛤が口を開いたようだと、人々は蛤坂と俗称した。それまでは妙慶寺坂であった。明治4年、蛤坂町となった。地子町の1つ。	寺町5丁目、野町1丁目	S42.9.1	野町	
早道町	はやみちまち	藩政時代、藩の足輕飛脚が居住していた組地であった。飛脚のことを早道とよんでいたの、この名がついた。足輕の組地であったが、明治になって一般の町人が住むようになった	幸町、菊川2丁目	S39.4.1	新竪町・菊川	
東馬場町	ひがしばばまち	浅野川馬場または関助町とも呼ばれた。藩士達の馬場があったことに由来する。もとは関助馬場。明治4年橋詰町と下博労町が合併して東馬場町となる	東山3丁目	S41.9.1	馬場	
備中町	びっちゅうまち	加賀藩士、岡島備中の下屋敷があったところで、元禄ころは備中上地町といい、のち、この名となった	材木町	S41.2.1	材木町	
百姓町	ひやくしょうまち	もと石川郡石浦村の農地であったが、江戸時代後期(寛永8年以前)に町立てされた。農民が住んでいた町ということからこの名がついた。地子町の一つ	幸町	S39.4.1	新竪町	
火除町	ひよけまち	藩政時代、防火のため城下町の所々に空地を設けて火除地としたが、こもその一つであったのでこの名で呼ばれた。火避町とも書いた。地子町の一つ	暁町	S41.2.1	材木町	
日吉町	ひよしまち	藩政時代に宮腰往還から広岡山王社への山王道が通称日吉町と呼ばれ、明治期に町名となったが、鉄道高架事業で高架下に消えた	広岡1丁目、中橋町	H8.10.2	長田町	
広岡町	ひろおかまち	ひろおかの地名は平安末期に見え、平岡野・弘岡と書き、藩政期には北広岡村となり、町地の拡大で広岡町となった	広岡1～3丁目、西念1丁目、駅西本町1丁目	S61.2.1	長田町	
吹屋町	ふきやまち	もと石川郡田井村の地内で、鋳物師や職人が住んだので、この名がついた。藩政期の記録には、鎔屋町(いがたやまち)とも書かれている。地子町の一つ	桜町	S41.2.1	材木町	
袋町	ふくろまち	藩政期の本町の一つで、この町筋が北国街道であった。道の両端が曲って袋のようであったところから、この名がついたという	安江町、尾張町2丁目	S40.9.1/S45.6.1	松ヶ枝	H19.3.1 復活
藤棚	ふじだな	この地はもともと成福寺・白山社の旧地で成福寺門前といわれていた。境内に大きな藤棚があったので、通称藤棚とも呼ばれていたが、明治4年に町名になった。地子町の一つ	城南1・2丁目	S39.4.1	菊川	
淵上町	ふちのえまち	浅野川の淵の上に来た町で、藩政のころは堀川川除町、堀川淵上町と呼ばれていたが、明治の初め、この名に改められた	笠市町、堀川町	S40.9.1	此花	
古寺町	ふるでらまち	藩政初期この地に寺が集められていたが、元和のころになってそのほとんどを寺町台へ移し、跡地をこの名で呼ぶようになった	片町2丁目	S40.9.1	長町	
古道	ふるみち	金沢城下から宮腰(金石)へ通じる古い道であったが、元和2年(1616年)新しく往還ができたので、新道に対して古道と呼んだ。地子町の一つ	昭和町、元菊町、中橋町、長田1丁目	S40.9.1/S41.9.1	長田町	
古道一番丁	ふるみちいちばんちょう	金沢城下から宮腰(金石)へ通じる古い道であったが、元和2年(1616年)新しく往還ができたので、新道に対して古道と呼んだ。地子町の一つ。明治4年、一番丁と二番丁になった	昭和町、芳齊2丁目	S40.9.1	芳斎	
古道二番丁	ふるみちにばんちょう	金沢城下から宮腰(金石)へ通じる古い道であったが、元和2年(1616年)新しく往還ができたので、新道に対して古道と呼んだ。地子町の一つ。明治4年、一番丁と二番丁になった	昭和町、元菊町	S40.9.1/S41.9.1	長田町	
古道鉄道宿舎	ふるみちてつどうしゅくしゃ	金沢城下から宮腰(金石)へ通じる古い道であったが、元和2年(1616年)新しく往還ができたので、新道に対して古道と呼んだ。大きな鉄道宿舎があったことから、この名がついた	元菊町	S41.9.1	長田町	

寶船路町	ほうせんじまち	寛永の大火のあと、犀川大橋詰にあった法船寺がこの地に再建されて、門前町をつくり法船寺町と呼ばれた。明治4年、宝船路町に改められた。地子町の一つ	中央通町、長町2丁目	S40.9.1	長町	
母衣町	ほろまち	藩政のはじめころ、母衣衆と称する武士の邸地があったので、この名がついたという。地子町の一つ	彦三町1丁目、尾張町2丁目	S40.9.1/S45.6.1	瓢箪町	
本馬町	ほんままち	本間町とも書き、本間殿町ともいった。町名は本間左近または本間助九郎が居住したことによるといわれる。明治5年、本馬町とした	野町2丁目	S42.9.1	野町	
又五郎町	またごろうちょう	加賀藩士、横山又五郎政賢の邸地があったので、明治5年、この名がついた	材木町	S41.2.1	材木町	
松本町	まつもとちょう	文政6年(1823年)川上新町から立町された。地子町の一つ。川上新町から立町された八町の一つ	城南2丁目、菊川1・2丁目	S39.4.1	菊川	
大豆田新町	まめだしんまち	持筒足輕の組屋敷地であった。町名はかつて大豆田村地内にあったことによる。明治4年町名となった	大和町	S41.9.1	長土堀	
大豆田町	まめだまち	石川県大豆田村の地で町立てが行われたことによる。地子町の一つ	長土堀3丁目、大和町	S40.9.1/S41.9.1	長土堀	
水車町	みずぐるままち	藩政初期、松任から来た油屋が用水に水車をかけて灯油などの製造を行ったことから、この名がついた。地子町の一つ	小橋町、元町2丁目	S41.9.1/S50.2.1	浅野町	
味噌蔵町間の町	みそぐらちょうあいのまち	藩政初期に軍用の味噌蔵が建てられていたところから、この名がついたという。味噌蔵を冠した町は六町あって、その一つが当町である	兼六元町	S41.2.1	味噌蔵町	
味噌蔵町片原町	みそぐらちょうかたはらまち	藩政初期に軍用の味噌蔵が建てられていたところから、この名がついたという。味噌蔵を冠した町は六町あって、その一つが当町である	大手町、尾張町1丁目	S41.2.1/S45.6.1	味噌蔵町	
味噌蔵町上中町	みそぐらちょうかみなかちょう	藩政初期に軍用の味噌蔵が建てられていたところから、この名がついたという。味噌蔵を冠した町は六町あって、その一つが当町である	兼六元町	S41.2.1	味噌蔵町	
味噌蔵町下中町	みそぐらちょうしもなかちょう	藩政初期に軍用の味噌蔵が建てられていたところから、この名がついたという。味噌蔵を冠した町は六町あって、その一つが当町である	大手町、兼六元町、橋場町、尾張町1丁目	S41.2.1/S45.6.1	味噌蔵町	
味噌蔵町東町	みそぐらちょうひがしちょう	藩政初期に軍用の味噌蔵が建てられていたところから、この名がついたという。味噌蔵を冠した町は六町あって、その一つが当町である	兼六元町、橋場町、材木町	S41.2.1	味噌蔵町	
三構	みつがまえ	もと高蔵寺前といったが、これを光岩寺とも書き、のちに光岩前を略して「みつがまえ」と呼んだことからこの名がついたといわれる	芳齋1・2丁目	S40.9.1	芳齋	
南石坂町	みなみいっさかまち	文政6年(1823年)石坂町の南にあったことで通称が町名となった。地子町の一つ	野町2丁目	S42.9.1	野町	
南町	みなみちょう	藩政期以前に「一向宗」が金沢御堂を拠点に寺内町を形成した永禄年間(1558-70年)にできたといわれる。金沢において、最も古い町の一つ。町名の由来は、当時は、金沢御堂の南側にあったことに因むといわれる	高岡町、香林坊2丁目、香林坊1丁目、尾山町	S40.9.1/S41.2.1	松ヶ枝	H20.11.1 復活
南長門町	みなみながとまち	加賀藩士、山崎長門の邸地があったところから、はじめは長門町と呼ばれていた。文政6年(1823年)、長門上ヶ町が町立てされた。長門上ヶ町は、文政6年(1823年)改称され、南長門町になった	片町2丁目、中央通町	S40.9.1	長町	
元車町	もとぐるままち	藩政初期、大豆田用水に水車を設け灯油を製造したところから、犀川油車、油車町とも呼ばれていたが、のち、この名がついた。地子町の一つ	長土堀2・3丁目	S40.9.1	長土堀	
木綿町	もめんまち	かつて木綿問屋が居住したことによる。地子町の一つ	東山1・2丁目	S41.9.1	馬場	
桃島町	ももばたけまち	もと泉野村の地で藩政期に桃の木が多く植えられたので桃島と呼ばれたという。また、古くからこの地に桃島があったからともいわれる。のち、民家が建ち、明治4年町名になった	野町3丁目、弥生1丁目	S42.9.1	野町	

森下町	もりもとまち	藩政初期、森下村の郷土、亀田大隅の子孫が染工になって居住していたので、この名がつけられた。本町の一つ	東山1・2・3丁目、森山1丁目	S41.9.1	馬場	
柳町	やなぎまち	町名の由来は、かつて伊予西条城主だった一柳監物の預所があり、その名に因んだという。その周辺に柳の木があったことによるとの説もある	本町1丁目、昭和町	S40.9.1	芳齋	
山崎町	やまざきまち	かつて山崎氏(五千五百石)の屋敷地があったことによる。明治2年町名となった	石引2丁目	S39.4.1	小立野	
山下町	やましたまち	文政4年(1821年)町立てされた。町名は同時に町立てされた山上町に対して山下町となった。地子町の一つ	山の上町	S41.9.1	森山	
山田屋小路一番丁	やまだやしろうじいちばんちょう	藩政時代、山田屋という魚屋が数代に渡り、住んでいたことから、この名がついたという。明治5年山田屋小路一番丁、二番丁となる	幸町	S39.4.1	新竪町	
弓ノ町	ゆみのまち	藩政時代、弓組の侍が住んでいたところで、後弓ノ町、升形弓ノ町とも呼ばれていたが、明治5年、この名に改められた。地名などを冠した弓ノ町がほかにもあった。地子町の一つ	本町1・2丁目	S40.9.1	芳齋	
横傳馬町	よこてんままち	藩政時代、藩用の人や荷物を運ぶために六十六匹の伝馬が置かれたことからこの名がついた。藩初は橋場町付近に置かれていたという。地子町の一つ。伝馬役を勤める上伝馬町の横町だったことにちなむ	片町2丁目、長町2丁目、中央通町	S40.9.1	長町	
与力町一番丁	よりきまちいちばんちょう	藩政時代、与力組の屋敷町とされた。一番丁から四番丁までであった。禄高200石～300石の与力の邸地が30軒～40軒あった	宝町	S39.4.1	小立野	
与力町四番丁	よりきまちよんばんちょう	藩政時代、与力組の屋敷町とされた。一番丁から四番丁までであった。禄高200石～300石の与力の邸地が30軒～40軒あった	宝町	S39.4.1	小立野	
六斗林一丁目	ろくとばやしいちようめ	平安時代の末に六動太郎光景という武士が住み、その付近に樹木が生い繁っていたので六動林と称され、転じてこの名がなった。地子町の一つ。一丁目から三丁目までであった	弥生1丁目	S42.9.1	弥生	
六斗林二丁目	ろくとばやしにちようめ	平安時代の末に六動太郎光景という武士が住み、その付近に樹木が生い繁っていたので六動林と称され、転じてこの名がなった。地子町の一つ。一丁目から三丁目までであった	弥生1丁目、野町3丁目	S42.9.1	野町	
六斗林三丁目	ろくとばやしさんちようめ	平安時代の末に六動太郎光景という武士が住み、その付近に樹木が生い繁っていたので六動林と称され、転じてこの名がなった。地子町の一つ。一丁目から三丁目までであった	野町3丁目	S42.9.1	野町	
六斗林弓の町	ろくとばやしゆみのまち	平安時代の末に六動太郎光景という武士が住み、その付近に樹木が生い繁っていたので六動林と称され、転じてこの名がなった。もとは六斗林の一部。弓組足軽の居住地になったことから、明治5年から町名となった	野町3丁目	S42.9.1	野町	
六枚町	ろくまいまち	藩政前期からある町人町でこの町の宅地税である地子銀が年間六枚であったところから、この名がついたと伝えられている。地子町の一つ	芳齋2丁目、本町2丁目	S40.9.1	芳齋	H16.6.1 復活